

# 軍記物語としての「平家物語」の学習指導

船 津 正 明

## 1. はじめに一軍記物語と「平家物語」一

軍記物語は戦記物語ともいう。実際に行われた合戦とこの合戦をめぐるさまざまな人間の姿を描いた「語りもの」の文学である。

作品としては中古に「将門記」や「陸奥話記」があるが、高等学校で取り上げる作品は中世になってからの作品の「保元物語」・「平治物語」・「平家物語」・「源平盛衰記」・「太平記」・「義経記」・「曾我物語」である。

「平家物語」を軍記物語の代表的作品として、高等学校教材に採用することには異論をはさむ者はいない。しかし、軍記物語ということばそのものを分析し、「平家物語」がこの中でどういう位置を占め、他の物語とどう異なっているかという点に関する学習指導の論は多くみることができない。

この点に鑑み、まず軍記物語ということばそのものと「平家物語」との関係を抑える。つぎに「国語Ⅰ」教科書採録作品を基とし、「平家物語」の本質の上に立った学習指導のあり方を追究し「平家物語」の捉え方について一つの視点を見出すのを本稿の目的とする。

## 2. 「国語Ⅰ」教科書における軍記物語教材とその特徴

高等学校で必修とされる「国語Ⅰ」教科書全17冊について、軍記物語の採録状況を調査すると下の表の如くである。

採録数	作 品	採録教科書の単元名
25	平家物語	
8	木曾最期	古典三(002) 歴史と人間(005) 古文に親しむ(008) 小説物語(二)(009) 説話と軍記(010) 中世の人間像(012) 中世の文学(013) 武人の運命(017)
7	祇園精舎	古典二(001) 物語と漢詩(004) 古文に親しむ(008) 小説物語(二)(009) 説話と軍記(010) 中世の文学(013) 古文への誘い(015)
3	忠度の都落ち	物語と漢詩(004) 古文に親しむ(008) 中世の人間像(012)

採録数	作 品	採録教科書の単元名
2	橋 合 戦	古 典 (二)(001) 人間を見つめて(011)
2	壇 の 浦	古文への誘い(014) 古文への誘い(015)
1	祇 王	ことばの研究②(003)
1	宇治川の先陣	古 文 (二)(006)
1	先帝身投げ	人間を見つめて(011)
1	太 平 記	
	俊基朝臣再関東下向事	日 本 の 文 章 (002)

\* ( ) の数字は教科書番号を示す。

表から、教科書(002)の一社が「太平記」を採録している以外は、全て「平家物語」を採録していることがわかる。「平家物語」の中でもとくに、「木曾最期」・「祇園精舎」に採録が集中している。

「祇園精舎」は従来から「平家物語」採録時に多く取られていた段であるが、今回の採録では、わずかではあるが「木曾最期」がこれを上回っている。「木曾最期」を多く採録していることに関して、この章から何を学習させようとしているかを考える必要がある。

表から「木曾最期」の単元名を抜き出してみると、「歴史と人間」(005)、「中世の人間像」(012)、「武人の運命」(017)という具合に一人の武将の生き方を考えさせるものとなっている。他の章と比較してみても一人の人間の生き様を追及させようという意図は明らかである。このことから、「平家物語」の学習指導は人間像をどう取り扱っていかかが大きな問題となることは必然である。

### 3. 「平家物語」教材の原典

「平家物語」は、軍記物語のジャンルの中で、最も芸術的な完成を示し、最も広く享受された作品であることは衆目の一致するところである。ところが、この「平家物語」を学習指導の対象教材として考えた場合、その論の希薄さを感じざるを得ない。

学習指導の際に、まず問題としなければならないのは、「平家物語」がいかなる軍記物語であるのかということである。そして、他の軍記物語との異質性を十分に把握しておかなければならない。この観点に立ち「平家物語」を考察追究する。

「平家物語」は、中世人によって生み出されたもっとも中世的な文学であることは論をまたない。<sup>1)</sup>

それでは、いかなる中世人によって生み出されたものであるのか、そして「平家物語」が特筆

すべき民族の遺産とまでいわれる所以はどこにあるのか。これらの問題は学習指導を展開するに当たってふまえておかなければならない。

軍記物語ということばを考察するとき、永積安明氏は、「軍記」と「物語」という別個の概念を含む語をいっしょにして「軍記物語」という学術用語とすることに疑問を抱いている。<sup>2)</sup>

初期の軍記物語である「保元物語」では、説話的なものがまだほとんどそのまま年代記的なものの中に挿入されていたにすぎず、物語的構想力は不十分、未成熟であったのである。これに対して「平家物語」は、「軍記」つまり素材として何らかの形で、軍（いくさ）・合戦を含んでいると同時に、物語的・説話的な要素を含んでいるのである。

このように「保元物語」と「平家物語」を比較対照しただけでも軍記物語というジャンルの中に全てを一括して包括することの困難性が理解される。しかし、だからといって、日本文学史上から、とくに高等学校の場合、軍記物語という名称を抹消することはできない。現にこの名称は定着しているし、軍記物語そのものに違いはないからである。この点から学習指導としては、軍記物語というジャンルに包括されている物語は、それぞれどういう本質を有しているかを熟知しておかなければ意味をなさないと考えられるのである。

軍記物語の中で、「平家物語」は、その文学史的意義は高く評価され、中世最高の叙事詩とされている。この点からすれば、高等学校国語科の軍記物語教材は「平家物語」のみに絞ってもよいと考えられる。従って先の表にみるごとく、「国語Ⅰ」教科書が採録しているのについては可しななければならない。

「平家物語」が「源氏物語」以来の伝統から国民の文学と成り得たのは、没落貴族を含めての中世人が、盲目の琵琶法師の「語り」として聞き得たということである。

こういう文学であり得た根拠について、永積安明氏は「『平家物語』が、古代末期にまきおこった全国的な治承・寿永の内乱の過程を、その内乱の指導的な地位にあった領主階級の立場にもたち入ってつかみ出すことができた点にある。つまり、新しい中世社会をつくり出す運動の旗手として、その先頭をきって進んで行った武士たちを、大小の英雄としてとらえ、かれらの行動がいやおうなしに歴史をつくって行ったこと、それはそれまでのどのような権威の力をもってしても、うちかちがたいものであることを、内乱のいわば表現であるところの源平のたたかいをとおして、力強くうち出して行った点にある。

しかも、中世変革のあゆみのジグザグなありかたを、それらの英雄の成功やつまずき、希望や絶望のなかにうきぼりにし、没落して行った貴族たち、また特にもっとも悲劇的な末路にさしかかった平氏一族の悲しみを悲しみとして受けとり、同情的に描きながらも、なおそのなかに貫いて行った。歴史の進歩・変革の必然性を、全体として動かしがたいものとして、おのずから語らないではおこなったところに、『平家物語』が古代のあらゆる物語から飛躍的に高まることのできた根本的な理由がある。」<sup>3)</sup>と述べている。

従来から「平家物語」の学習指導については、中世最高の叙事詩として指導されてきた。これはこれなりに真実のこととして指導の必要はある。しかし、中世最高の叙事詩のみにとどまり、事足れりとしていたのでは「平家物語」という日本文学史上での最高の軍記物語作品を指導した

とはいえないのである。

永積安明氏のいう「平氏一族の悲しみを悲しみとしてうけとる」ことのできた当時の世相を背景とした学習指導がなされなければならない。すなわち「平家物語」という作品のみにとどまるのではなく、その時代の背景をたどることによって学習指導の真価が表れてくるのである。

平家の没落物語に合わせて雑多な階層の人が、盲目の琵琶法師の奏でる琵琶の音によって、自己の運命を考え、世界観を形成していった点に「平家物語」の国民文学としての真骨頂がある。このことを学習指導する際の必須のこととする必要があるのである。

「平家物語」の今一つ重要な点は、前述のように、軍（いくさ）・合戦を含んでいる上に、物語的・説話的な要素を含んでいることにある。「平家物語」の物理的・説話的媒介性は他のいかなる作品よりも深く、これが最高の中世叙事詩を生んだ所以である。

さらにつきすすめていえば、「平家物語」は作中人物が物語的・説話的に捉えられているにもかかわらず、すべてこれが平家の没落にたぐりよせられているところに、<sup>4)</sup>他の軍記物語との異質性が存するのである。物語的・説話的要素に、平家の没落が加わることによって、「平家物語」独特ともいえるその特色を持っていることに充分注意しなければならない。さらに、「平家物語」の内部構造として、和漢混淆文の完成をみたこと、「語り」が構造決定の支えとなっていたことも考えておかなければならない。

「平家物語」の学習指導の際に不可欠なものとしては、やはり「徒然草」二二六段である。これは「平家物語」について、作者と成立年代を一番古く且つ具体的に物語っているからである。つまり、後鳥羽院の時代に、慈鎮和尚（大僧正慈円）の世話になっていた信濃前司行長なる人物が「平家物語」をつくって生仏という東国生まれの盲人に語らせたというのである。

もちろん「平家物語」の学習指導において、作者や成立時期等を明確にすることはできない。しかし、「徒然草」によって推測されている作者像や成立の事情は、この「平家物語」との間には何ら矛盾を生じせしめるものではない。<sup>5)</sup>むしろ平曲者流の間書きと推測されることからその所説の信用性は大きい。<sup>6)</sup>

さて、つぎに「平家物語」を高等学校の古典教材とすることに対して、どこに有意義な点があるのかということであるが、この点について『文部省 高等学校国語指導資料古典(古文)の学習指導』では、「平家物語」を「古典に現れた人間の生き方を考えることに重点を置く」学習指導の例として出している。<sup>7)</sup>これは「人間の生き方」の面から「平家物語」が教材として有意義な作品であることを認めていると考えることができる。

「平家物語」がいかに教材として有意義であるかという面からは多くの人達の論をみることができる。

西尾実氏は、「新しい時代の創造者としての英雄をちりばめる点において、中世文学の序曲を奏でている。」<sup>8)</sup>とし、

増淵恒吉氏は、「朗読を重んじ、その声調美を味読させるべきである。」<sup>9)</sup>と述べる。

大矢武師氏は、「名文(平家物語)を暗誦させることは古文に親しみをもたせ、文法の理解を容易にする。」<sup>10)</sup>とする。

さらに、高等学校の現場から、

松本重徳氏は、「『平家物語』という作品のもつ『人間的』であり『現実的』であり『個性的』である文芸的性格から考えると、高一の段階で、しかもなるべく初期の段階に学習を試みてもよい。」<sup>11)</sup>との論を出している

平塚寛次郎氏は、「高校一年のなかばころ、生徒の興味や関心をそそり、しかも平家物語の『血』が流れているような教材を有機的に取り上げて学習させることが効果のあがる方法だと思っている。」<sup>12)</sup>と述べる。

古典としての価値が高いという理由からだけでも教材として取り上げる格好の作品といえるが、なかでも文学として描かれた人間像や人間社会が感動を伴うもの場合は、文学教育の面からも好適の教材と思われるし、それによって人間社会の感動経験も味わわせることができる。<sup>13)</sup>従って「平家物語」を古典教材とすることはその価値たるや大なるものとしなければならない。

#### 4. 学習指導に当たって留意すべき「平家物語」の特質

##### (1) 「平家物語」の底本

「平家物語」の「国語Ⅰ」教科書採録箇所25のうち、「語り本系」の「一方流本」の覚一本を底本とした「日本古典文学大系」を採録したのが14、覚一本が欠いている「祇王」「小宰相」の二章段を収めている覚一別本を底本とした「日本古典文学全集」を採録したのが10、百二十句本を底本としたのを採録したのが1となっている。

それぞれについて調査してみると下のようである。

##### ○「日本古典文学大系」(「語り本系」の「一方流本」の「覚一本」)

採録数14……採録教科書番号(002)・(003)・(004)・(006)・(009)・(011)・  
(012)・(013)・(017)

(同書下10頁)

「本大系本として採択された覚一本平家物語は、諸研究が今日到達し得た限りに於て、読み本系本の各本と、語り系本のそれとが層々重なりあって形成され、しかもそのまま活字を通して読書する受容に堪えるという意味で、今日の意味を持つ、或る卓れた古典的遺産である。」

##### ○「日本古典文学全集」(「覚一本」が欠いている「祇王」「小宰相」の二章段を収めている「覚一別本」)

採録数10……採録教科書番号(001)・(008)・(010)・(014)・(015)

(同書(1)17頁)

「現在最も流布する覚一本系の諸本が、鎌倉時代から室町時代へかけての流動・変遷のあとにいきついた一つの代表的な本文であることは疑いがない。そこで、本書では、覚一本系の一本を底本とすることにした。」

##### ○「百二十句本 平家物語」(古典文庫)

採録数1……採録教科書番号(005)

諸本を読みくらべながら「平家物語」を読み進めていくのが理想の姿であるが、高等学校の領

域では、種々の事情からこれができるはずがない。しかも採録箇所がほんの一部しかない教材では到底不可能といわざるをえない。「日本古典文学大系」が「覚一本」を底本とするに当たって述べているように、然るべき拠点を定めて、それなりに読んでいくことも「実り多いこと」としなければならぬ。<sup>14)</sup>

「平家物語」の諸伝本は大別して二つの系列に区分される。

一つは平曲の詞章としての性格をもつ「語り本系」、今一つは平曲の語りとはあまり関係がなく、記録性の濃い「増補系（読み本系）」とである。

「語り本系」は平曲の流派によって、「一方流本」と「八坂流本」とに分けられる。それに灌頂巻を特立させない諸本（屋代本・平松家本・鎌倉本・百二十句本など）があるが、これは八坂流本の古本であるか、或いは平曲が二流派に分岐する以前の古本であるのか確定していない。<sup>15)</sup>

現存する諸本の中で、最も古態を示すのはどの本であるのかという問題と、そもそも「平家物語」が琵琶法師の語りを意図してつくられたものか、読まれることを目的としてつくられたものであるのかわからない現状においては、<sup>16)</sup> 高等学校の学習指導は、教科書が採録している底本の意図によりくみとるほかはないのである。

## (2) 「平家物語」の構成

構成については、種々の説をみることができるが、大別して三つに分けるのが一般的である。<sup>17)</sup>

第一部 ……（巻一～巻四）平清盛を中心。

第二部 ……（巻五～巻八）木曾義仲を中心。

第三部 ……（巻九～巻十二）源義経を中心。

（「灌頂巻」……平家の追悼文ともいうべきもの）

「国語Ⅰ」教科書採録箇所をこの構成に従って分類してみると、

第一部採録10、第二部採録3、第三部採録12となっている。

「平家物語」をどう読み、どう理解させたらよいかという問題は、一律に規定することは難しいことかもしれない。しかし、学習指導の際には、「平家物語」が「語り」に媒介されながら物語的なものと結合し、<sup>18)</sup> 日本的な中世叙事詩を形成してきたということ、さらには中世的世界から中世人によって生み出されたもっとも中世的な文学であるということをしかり把握させての学習指導がなされなければならない。

## 5. 「平家物語」における学習指導上の留意点

### (1) 「木曾最期」の場合

益田勝実氏は、「義仲は新しい中世の英雄群像の一つのもっとも典型的な代表として出現している。」<sup>19)</sup> とし、「平家物語」の人間描写を、「戦いの行動のみの描写」と「戦いの中で人間の内部からほとぼり出る人間愛を中心の描写」の二つの造型法によっているとする。まさに、この「木曾最期」にみる描写は、この二つの造型法がみごとに統一された章であるといえるが、主として「人間愛」の描写についてたどってみる。

まず、義仲が巴に「おのれは疾う疾う、女なればいづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふな

り。」と巴を脱出させることばにはじまり、その後義仲と兼平との主従の関係を叙する章は、新興勢力としての武士の動きから主従という関係を越えての人間像へと発展していくのである。

義仲と兼平の主従二騎になってから、「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」という義仲に対して「御身はまだ疲れさせたまはず、御馬も弱り候はず」という兼平の言がそうであり、「なんぢと一所で死なん」という義仲に対して「最後の時不覚しつれば長き疵にて候ふなり。」と戒め、自害をすすめる兼平との対話は、無駄な描写を一切はぶき、簡潔なものとなっている。<sup>20)</sup>

この章は、義仲と兼平が主従の関係からそれ以上にお互いの人間愛を表出させている箇所である。とくに、「なんぢと一所で死なん」という義仲の言は、これで最期と覚悟した義仲の悲痛な叫びである。戦いという場で、人間性・人間愛が吐露される場面である。この人間愛こそ学習指導の際、十分に把握させる必要がある。

恐らく作者は、このような人間愛に感動したものであろうが、<sup>21)</sup>同時に時代を越えて現在にまで同じ感動を呼び起こすものとして採録が多いのもっともなことである。

「平家物語」は滅びの文学といわれる。盛者必衰の思想の故に、各所に「最期」が語られている。しかし、同じ「最期」でもこの章は、人間愛をそこに描写している箇所の典型である。そしてこれを学習指導の対象として捉えることこそ根幹である。また、「木曾最期」のあとに展開される歴史の必然は何であったかということを解明できるような学習指導が要求されるのである。

## (2) 「祇園精舎」の場合

この章で学習指導の際、問題とすべき第一の点は、「平家物語」という作品の問題でもある主題という面である。つまり、この冒頭の序章が「平家物語」全巻を覆う主題として適切なものであるか否かという問題は避けて通ることができないものである。<sup>22)</sup>

この主題という問題に一つの布石を投じたのは小林秀雄氏である。

有名な「無常といふ事」で下のように述べている。

「平家物語のあの冒頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。平家の作者の思想なり人生観なりが、其處にあると信じ込んだが為である。一應、それはさうに違いないけれども、何も平家の思想はかくかくのものと仔細らしく取上げてみるほど、平家の作者は優れた思想家ではない。彼はただ当時の知識人として月並な口を利いてゐるに過ぎない。」<sup>23)</sup>

これは「平家物語」にとって本質的な問題を提起している。つまり、この「祇園精舎」の序章からは、思想観・人生観等をたどることはできないという論であるといえる。これを小林秀雄氏は、「月並」ということばで表現している。

谷宏氏は、この「祇園精舎」の章を捉え、我々は一般的にこの冒頭の序章から「平家物語」を諸行無常の文学、あるいは平氏の盛者必衰の物語というふうに見えるが、「平家物語」の作者は「人生無常の思想を主張しようがために、または平氏の悲劇的な運命への感動を表明しようがために」<sup>24)</sup>この序章をつくったのではないであろうと論じている。さらに、谷宏氏は、平安朝の伝統的な社会体制と秩序を絶対視し、永遠視している自己の信念を新たにし、その信念が正しいことを平氏の出世と栄華という事実在即して立証してゆこうがために序章を語ったのであるという具

合に、社会的背景を捉え、そこからこの「祇園精舎」の章の性格付けをしている。

この両氏の論をみると、小林秀雄氏の論は「平家物語」の捉え方において、表面的に何を描いたかという点からのみの論で正鵠を得ていないし、<sup>25)</sup> 谷宏氏の論にみる「平氏の出世と栄華という事実云々」の条は、何もこの序章だけに限ったことではなく、後の章、たとえば教科書にも多く採録されている「祇王」の章にも横溢としている。従って両氏とも正鵠を得た論とはいえないと考えられる。

「日本古典文学大系」は、この冒頭の章に注目し、「平家物語」一篇の受け取り方は、この章で決まるとし、その補注で、

「吾々は仏教上の無常観が、観念的に説かれていることに満足すべきではなくて、そこに作者が平家物語という或る大がかりの物語を語ろうとする、いわば説話文学者の姿勢がかくされていることを知らなくてはならない」とし、説話的要素に大きな比重を置いている。さらに論をすすめ「作者がここで持ち出している『諸行無常』はこのような祇園精舎物語の中のそれであって、随って読者はこの無常観を単なる思想としてはだかにして受け取ってはならない。」<sup>26)</sup>と無常観の捉え方に言及している。

この問題に関して、戦後一貫して中世文学、とくに「軍記物語」に関して研究を続けてきた永積安明氏は、<sup>27)</sup>この「日本古典文学大系」の補注の説を受けて「説話文学的姿勢云々」について、これは傾聴すべき提言であるが、「無常観としての思想的側面については特別な解説はほどこされていない」とし、この序章に表現された無常観の思想的意義を今少し追究する必要があるとする。<sup>28)</sup>

つまり、永積安明氏は、この序章にみられる無常観は、「平家物語」の作品形成にとって、またその文学としての独自性にとって、はずすことのできない積極的契機の表現であったのではないかとするのである。

さて、ここで高等学校の教科書傍用として使用されている教師用指導書を調べてみる。これは教科書のように編集されているわけではないので、それぞれによって見解を異にしている。以下これを示すと下のようになる。

(数字は教科書番号を示している)

○(001)……平家物語全編の主題を掲げ、かつその最も顕著な例として「平家物語」の中心人物のひとりである平清盛に言及する。

○(006)……平家一門に一貫して流れる思想は、冒頭文に示されるように、仏教の諸行無常であり、欣求浄土であり、因果応報である。(中略)無常観と現実に強く生きる人間像という二つの相反する要素が見事からみ合って、一編の叙事詩的・国民文学的作品を形成しているといえるであろう。

○(008)……この章はあくまで補助教材として扱う。この文章が、普通に言われる序文という意味で、「平家物語」の思想的立場を示すと考えるのは誤りであって、ばらばらに語られていた物語を整理統合する過程でつけられた「敗れ去った者のあわれを静かに申う言葉(富倉徳次郎)」という見方が正しいであろう。小林秀雄氏の見解もまた、当然の措置だといえよう。

○(015)……この序章をいかに捉えるかという点に関しては叙事文学的側面を重視するか、思



想的・世界的側面を重視するか、議論は分かれるところである。

以上、序章に関して、諸家の論および指導書の説等を種々概観してきたが、学習指導の際に留意すべき事項として、下のようによまとめることができる。

① 序章表現が示している仏教的性格は注目させる必要がある。それは「平家物語」が語ろうとする平家一門の興亡の史実を諸行無常の理によって描こうとする意図からである。

② たとえば「方丈記」の序章にみられるような、いわば詠嘆的ともいえる無常観（無常観に立ちどまって情調的に収斂されているような無常観）ではなく、「平家物語」にとって不可欠な独自性を持ったものである。<sup>29)</sup>つまり、当時の一般的な最大公約数的な末法思想の常識の上に立ったものではなく、平家の没落という運命観の上に立ったものである。

③ 「語り」としての序章と「平家物語」という一つのまとまったものとしての序章とは自ら異なってくる。語りの場合、琵琶法師は面白い説話・合戦譚しか語らないはずである。どんな名文であっても、琵琶法師がいくら流麗に冒頭文を語ったところで一般大衆にアピールするはずはない。

④ 一つのまとまった本として見た場合、少なくとも冒頭におかれるということは、その物語にとって不可欠なものといわざるをえない。従って、この場合は「平家物語」全体の冒頭であることを念頭に学習指導していく必要があるのである。

以上の①・②・③・④から、序章の学習指導は、教材として取り上げる場合、補助教材的にするのではなく、正規の教材として取り上げることを第一としなければならない。「国語 I」教科書で、この序章を参考程度位にしか取り扱っていないものがあるが、これでは「平家物語」の真の内容を指導することはできないと思われる。序章について確固たる学習指導を行い「平家物語」の主題が、戦いであり、仏教思想であることを十分に把握させておく必要がある。また、学習指導の際、物語の進行が全て平家の没落に集約されていくものとして、本来の「語り」ということをからめると同時に、「平家物語」の成立という問題点にまで波及させていくことを欠かしてはならないのである。

### (3) 「忠度の都落ち」の場合

巻七の後半は、ほとんどが平家の都落ちに費やされている箇所であるが、作者がとくに力を入れた部分であろうことが想像される。<sup>30)</sup>ここでは殺伐とした戦場でも、なお風流を忘れない一人の武将の姿を明確に捉えさせることを主眼とする。

「都落ち」に当たっての忠度の心残りは何であったのか、切々と語りかける声調に合わせて、どこに「哀れ」があるのかを目標として学習指導していく必要がある。さらに、「言葉のリズムの美しさ」が横溢している点を把握させておくこともこの章の重要な点である。

薩摩守忠度と歌の師俊成卿との会見場面は、武士であるとともに、和歌を愛し、風流を忘れなかった忠度のことを述べたもので、自ら読み進んでいくうちに感興を催す章である。従って学習指導も、忠度を中心にしながら、俊成の態度と心情を把握させ、さらに文学史的な面にまで波及させ、勅撰集の意義にまで発展させる必要がある。

この章の学習指導上の留意点は下のようによまとめることができる。

① 都落ちという重大な局面に至っても、なお風流を忘れない忠度の和歌に対する執着と、これに相対する俊成の気持ちを理解させる。

② 俊成の態度、忠度と俊成の交流という面から和歌そのものを考え、戦乱の中における心の交流と触れ合いを感得させる。

#### (4) 「橋合戦」の場合

「平家物語」で合戦描写の場面としては、この章は最たるものである。合戦ということから、そこに登場してくる人間の動き、つぎからつぎへと展開する合戦のさまを的確に把握させ、いかに描写されているかを中心にして学習指導のあり方を考えなければならない。戦場における躍動する人間像の把握が肝要なのである。<sup>31)</sup>

「橋合戦」の合戦記は、集団と個人の合戦の場面が生き生きとダイナミックに表現されている箇所である。「平家物語」の主題は「戦い」である。合戦こそ中核である。ただこの合戦が史実のまま記されているのではないことを把握させることは必要である。作者の虚構はどこにあるのかの解明をしなければならない。<sup>32)</sup> 「平家物語」の合戦は、合戦そのものから発展させて語りの要素を加え、文学へと昇華していくことを学習指導しなければならないのである。

#### (5) 「壇の浦」・「先帝身投げ」の場合

「壇の浦」の場合は、この章に至るまでの「あらすじ」をつかませることを第一目標とし、「教経」「知盛」の二人の人物像を中心に内容を把握させながら音読による学習が必要である。この章は、他の章より、より音読の効果が期待できる。これにより生徒の興味と関心を喚起させることができるからである。平家方の教経の勇壮な最後の戦いと平家の運命を見通している知盛の最期を描く場面であり、二人の人物像をたどることが学習指導上のポイントである。

「先帝身投げ」の場合は、哀話として幼い帝が二位尼に抱かれて入水する話はあまりにも悲劇的である。その悲劇の中心はやはり幼い帝に集約されているが、ここでは脇役的存在である二位尼に焦点を当ててみる必要がある。二位尼の女性像をたどることを目標とし、二位尼の振舞が武士にも劣らない行動であったことを学習指導の留意点とする必要があるのである。<sup>33)</sup>

#### (6) 「祇王」の場合

平家が隆盛を極めた時期である故に、平清盛の人物像を考えさせることができる重要な章である。そしてこの章の祇王と仏御前の性格とを合わせることにより「平家物語」の作品の内容にまでかかわることができる。

この章の祇王の姿は、あわただしく散り去った平家一門の姿を示しているともいえる。<sup>34)</sup> 祇王は涙もろく純情な女であったこと、一度決心すると毅然たるものを持っている女として描かれていること等を留意する必要がある。<sup>35)</sup> 祇王を描くことにより、作者は何を言おうとしたのか、祇王が最後に到達した信仰は、この「平家物語」でどういう意味を持っているのか等留意すべき点が多い。

この章については、女性関係の物語とともに増補されたものであるという説がある。<sup>36)</sup> これを端緒として「平家物語」の女性像にまで発展させると興味を引く教材となるかもしれない。

#### (7) 「宇治川の先陣」の場合

この章は、一篇の独立した物語としても十分に鑑賞にたえる名篇である。<sup>37)</sup>

まず、「先陣争い」の意味そのものを理解させることが必要である。これは当時の武士の生き方にまで関連発展させることが可能である。

学習指導としては、宇治川の先陣争いが展開されるまでの歴史的な経緯・背景・当時の天下の情勢等の予備知識を与えることが大切なことである。<sup>38)</sup>そして、東国武士団の集团的な動きが見事に捉えられていること、この動きの中で、佐々木・梶原の個人的な対決をくっきりと浮かび上がらせていること<sup>39)</sup>を留意して学習指導していく必要がある。

## 6. おわりに

軍記物語を代表する「平家物語」については、多くの研究がなされ、これに伴う論文が発表され、また研究書が刊行されている。これら膨大な資料を前に「平家物語」の学習指導はいかにあるべきかという問題を取り上げてみると、今さらのように「平家物語」教材の難しさが認識される。

元来は「平家物語」の本質がどこにあり、どういう特徴を有しているかを重点的に整理しながら論をすすめるべきであったかもしれない。しかし、教材として取り上げる以上は指導者は当然その本質なり特徴なりは充分把握されているという前提に立っている。それに高等学校で取り上げる教材は、先の「国語Ⅰ」教科書採録の表にみるごとく限定されている。指導者たるもの当然その本質論は把握した上で学習指導にかからなければならないのである。こういう観点に立ち、本稿は学習指導のあり方を論述してきたつもりである。ただ「国語Ⅰ」教科書採録教材に限定したため大幅な制約を余儀なくさせられ、意を尽くせなかったことは否めない。結果論ではあるが、むしろ「国語Ⅰ」教科書採録の適否をからめながらの論にすべきではなかったかと思われるが、全国の高等学校で学習指導されている内容をまず追究すべきであるということが優先した結果である。

学習指導のあり方自体まだ多くの問題点を有しているように思われる。今後の課題としたい。

### 〔注〕

- 1) 日本古典文学大系『平家物語』上 高木市之助ほか(昭38.岩波書店) 6頁.
- 2) 永積安明『中世文学の成立』(昭38.岩波書店) 170頁.
- 3) 永積安明『中世文学の展望』(昭31.東京大学出版会) 81頁~82頁.
- 4) 2)の注 180頁.
- 5) 1)の注 13頁.
- 6) 日本古典文学全集『平家物語』一 市古貞次(昭48.小学館) 9頁.
- 7) 『文部省 高等学校国語指導資料古典(古文)の学習指導』(昭50.) 163頁.
- 8) 西尾実国語教育全集第九卷(昭51.教育出版) 14頁.
- 9) 増淵恒吉国語教育論集上巻, 古典教育論(昭56.有精堂) 157頁.
- 10) 大矢武師『高校国語教育の理論と方法』(昭52.明治図書) 125頁.

- 11) 松本重徳「物語の指導」(平家物語)  
 (『高等学校における古典(古文漢文)指導の理論と実践』昭54. 明治書院 268頁).
- 12) 平塚寛次郎「平家物語Ⅲ木曾最期」  
 (『高等学校国語科教育研究講座第八巻』昭49. 有精堂 150頁).
- 13) 桑原 隆「文学教育」  
 (『講座中学校国語科教育の理論と実践第一巻』昭56. 有精堂 243頁).
- 14) 日本古典文学大系『平家物語』下 高木市之助ほか(昭35. 岩波書店) 7頁.
- 15) 14)の注 12頁～46頁.  
 諸本の分類
1. 語り本系
    - (イ) 一方流本(覚一本, 覚一別本, 葉子十行本, 下村時房刊本, 流布本)
    - (ロ) 八坂流本(中院本, 城方本)

\* 屋代本, 平松家本, 鎌倉本, 百二十句本……八坂流の古本か, 二流に分岐する以前の古本か不明。
  2. 増補系(読み本系)
 

源平闘諍録, 四部合戦状本, 南都本, 南都異本, 延慶本, 長門本, 源平盛衰記。
- 16) 信太周「平家物語Ⅰ祇園精舎」  
 (『高等学校国語科教育研究講座第八巻』昭49. 有精堂 111頁).
- 17) 永積安明3)の注 127頁.  
 富倉徳次郎 日本古典鑑賞講座『平家物語』(昭32. 角川書店) 6頁.
- 18) 2)の注 50頁～51頁.
- 19) 益田勝実「木曾義仲」(日本古典鑑賞講座『平家物語』昭32. 角川書店) 369頁.
- 20) 石母田正『平家物語』(昭32. 岩波書店) 94頁.
- 21) 山下宏明「中世文学に現われた英雄像—木曾義仲」(国文学, 昭42. 3).
- 22) 15)の注 115頁～118頁.
- 23) 講談社版 日本現代文学全集68所収(昭和18年5月筆の分)
- 24) 谷 宏「祇園精舎の段について」(『日本文学古典新論』昭37. 河出書房新社) 124頁.
- 25) 15)の注 118頁.
- 26) 日本古典文学大系『平家物語』上補注(昭34. 岩波書店) 433頁.
- 27) 永積安明氏の論については, 下のものにみることができる。  
 『中世文学論』(昭28. 同心社), 『中世文学の展望』(昭31. 東京大学出版会).  
 「平家物語の文体—中世文学の成立として—」(『日本文学古典新論』昭37. 河出書房新社所収).
- 28) 2)の注 132頁.
- 29) 永積安明氏前掲の論文および石母田正氏(『平家物語』昭32. 岩波書店)等この観点に立っていると思われる。

- 30) 6) の注 19頁.
- 31) 東京都教育庁指導部『高等学校教育開発指導資料集国語』昭和55年度 11頁.
- 32) 加美 宏「平家物語の全巻全章段をさぐる 橋合戦」(国文学, 昭 43. 10)
- 33) 井手恒雄「あわれの文学—いわゆる武士道精神・仏教思想について—」  
(日本古典鑑賞講座『平家物語』昭32. 角川書店) 321頁.
- 34) 6) の注 21頁.
- 35) 佐々木八郎「女性たち」(日本古典鑑賞講座『平家物語』昭32. 角川書店) 402頁.
- 36) 20) の注 81頁.
- 37) 加美 宏「平家物語Ⅱ宇治川の先陣」  
(『高等学校国語科教育研究講座第八巻』昭49. 有精堂) 135頁.
- 38) 武田 孝『古典語・古典教育論考』(昭56. 教育出版センター) 283頁.
- 39) 37) の注 127頁.